

と年六三九一機  
**威脅の露赤**  
ばは戦し若露日

特251

355

5  
8

596



10 銭

編一第 書叢識知

1



\*0010001000\*

0010001-000

特251-596

危機一九三六年と赤露の脅威

佐藤鉄城・著

知識と修養会

昭和8

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月2日  
付で文化庁長官の裁定を受け使用するものです

と年六三九一機 特251

355

5  
8

# 威脅の露

596

## ばは戦し若露日



10 錢

編一第 書叢識知

一九三三

と年六三九一機危

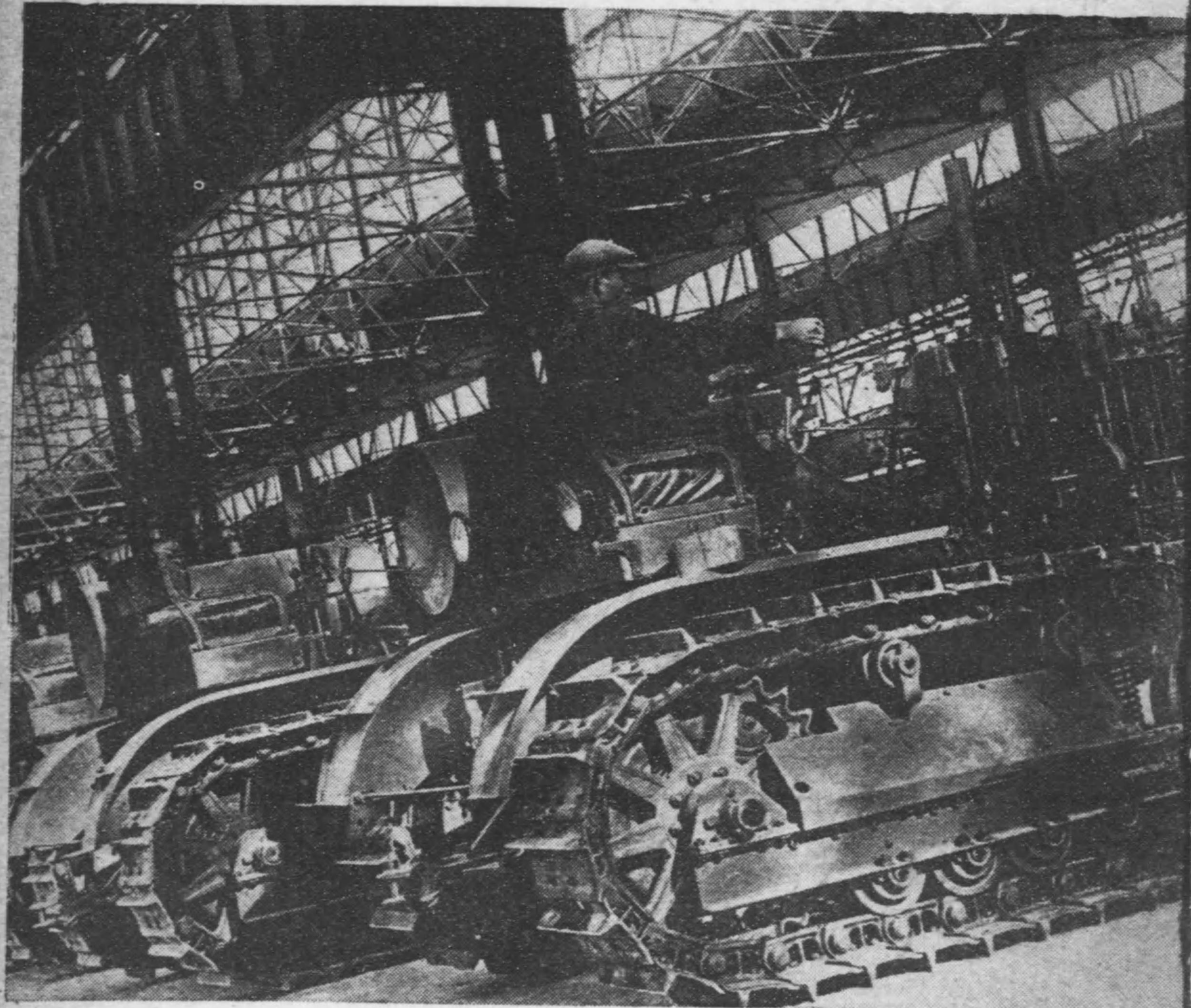
赤  
露  
の  
脅  
威



佐藤鐵城著  
知識と修養會



# 報 畫 情 軍 ト ー エ ヴ ソ



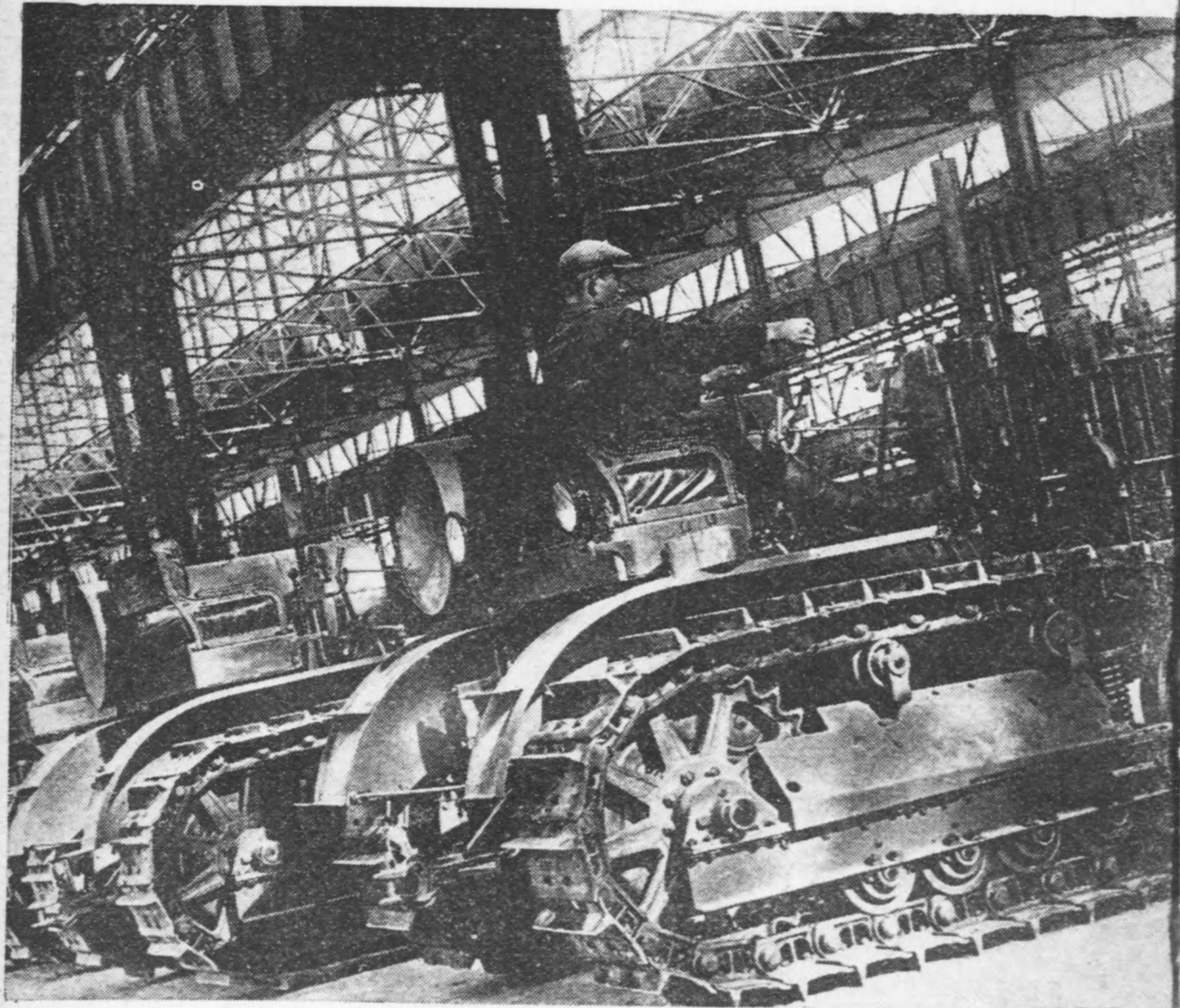
。でのもす示を部一場工ータクラトるけ於にクスンピアリエチは圖上  
 は一タクラトのこほな。るあで事のとるす有を力能作製の臺百くよ日一  
 すり變早と車戦は合場ふ云とざいひ云と一タクラト型るひあ。らか状型  
 。るゐて來出にうやる

## 目 次

### 報 畫 軍 赤

◆	チエリアピンスクのトラクター工場	一
◆	赤軍の砲兵隊及び自動車砲隊	二
◆	ドニエール発電所	三
◆	軍備強化ポスターと歩兵隊	四
◆	バクラーの大油田	五
◆	ANT式爆撃機と騎砲兵	六
◆	赤軍觀兵式	七
◆	危機に際して	八
◆	露國の極東政策	一三
◆	日滿ソの關係	一五
◆	ソ國の極東赤化運動	一八
◆	ソ國の軍備擴張と極東の戦備	二二
◆	滿洲國の治安と皇軍の活動	二三
◆	日ソ若し戦はゞ	二三
◆	東部戦線	三三
◆	赤軍極東配置要圖	三四
◆	北部戦線	三七
◆	西部戦線	四〇
◆	外國誌に現れた日露戦争觀	四三

# 報 畫 情 軍 ト ー エ ヴ ソ

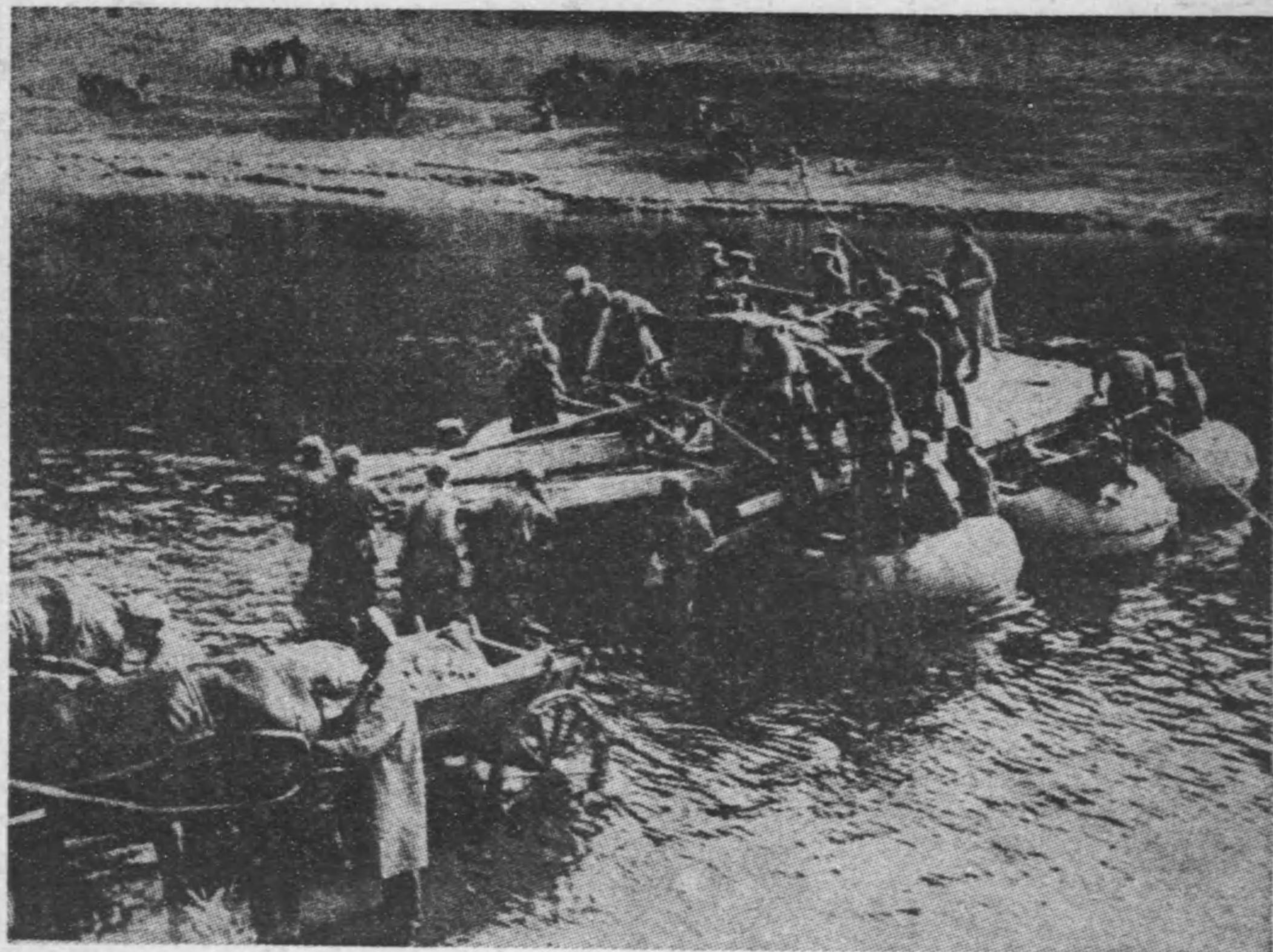
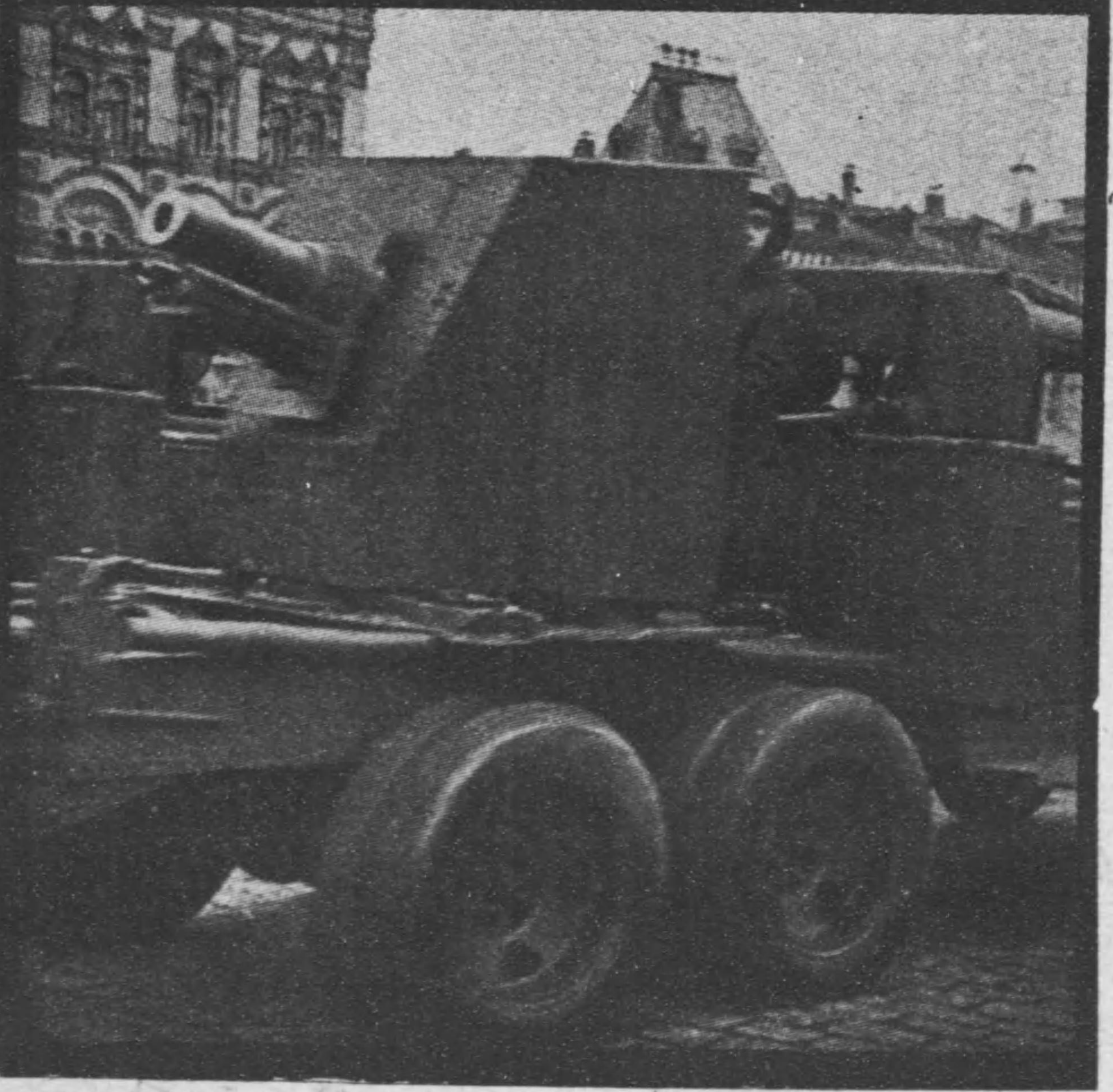


。でのもす示を部一の場工ータクラトるけ於にクスンピアリエチは圖上  
 は一タクラトのこほな。るあで事のとるす有を力能作製の臺百くよ日一  
 すり變早と車戦は合場ふ云とざいひ云と一タクラト型るひあ。らか狀型  
 。るゐて來出にうやる

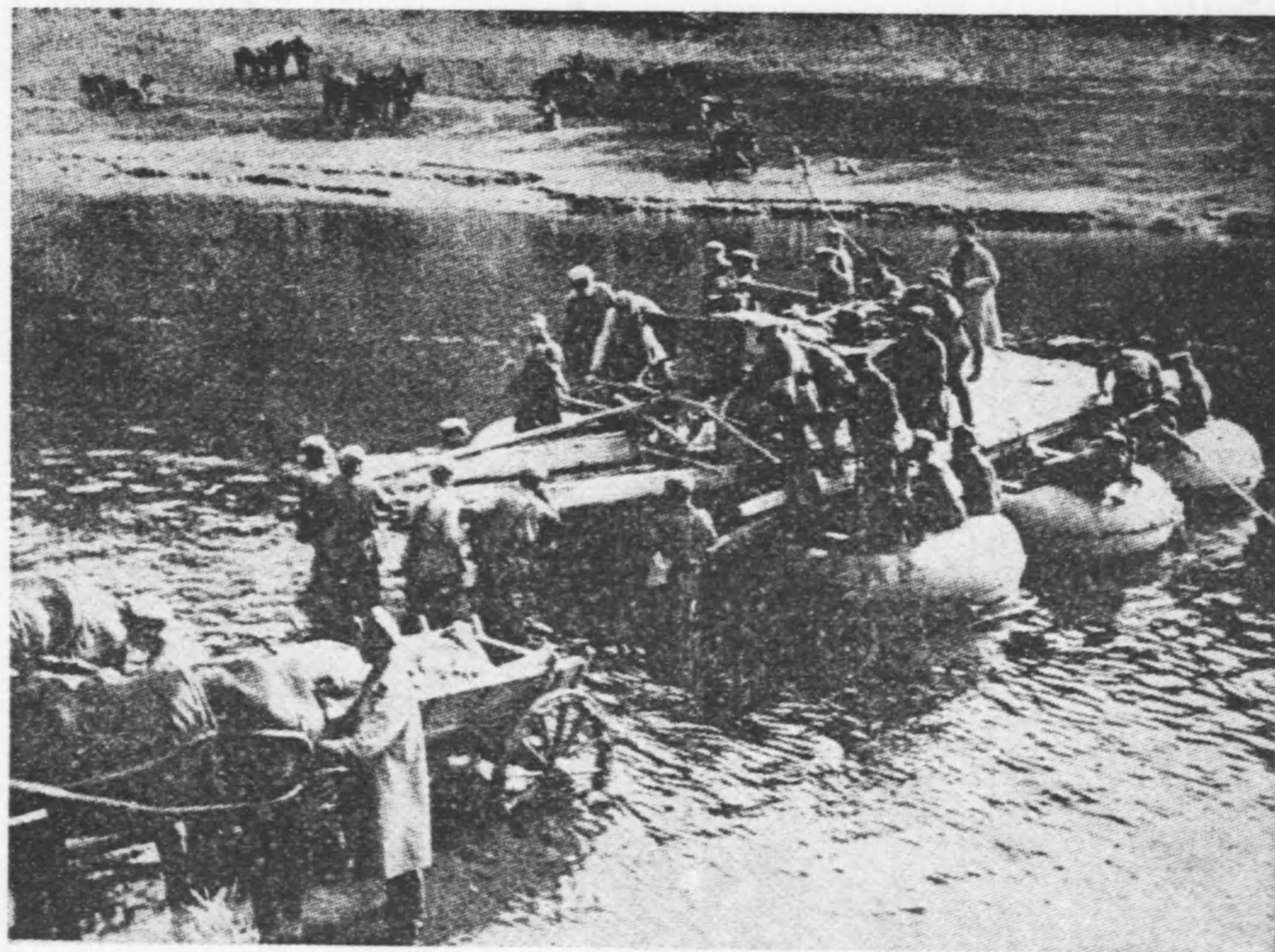
## 目 次

### 報 畫 軍 赤

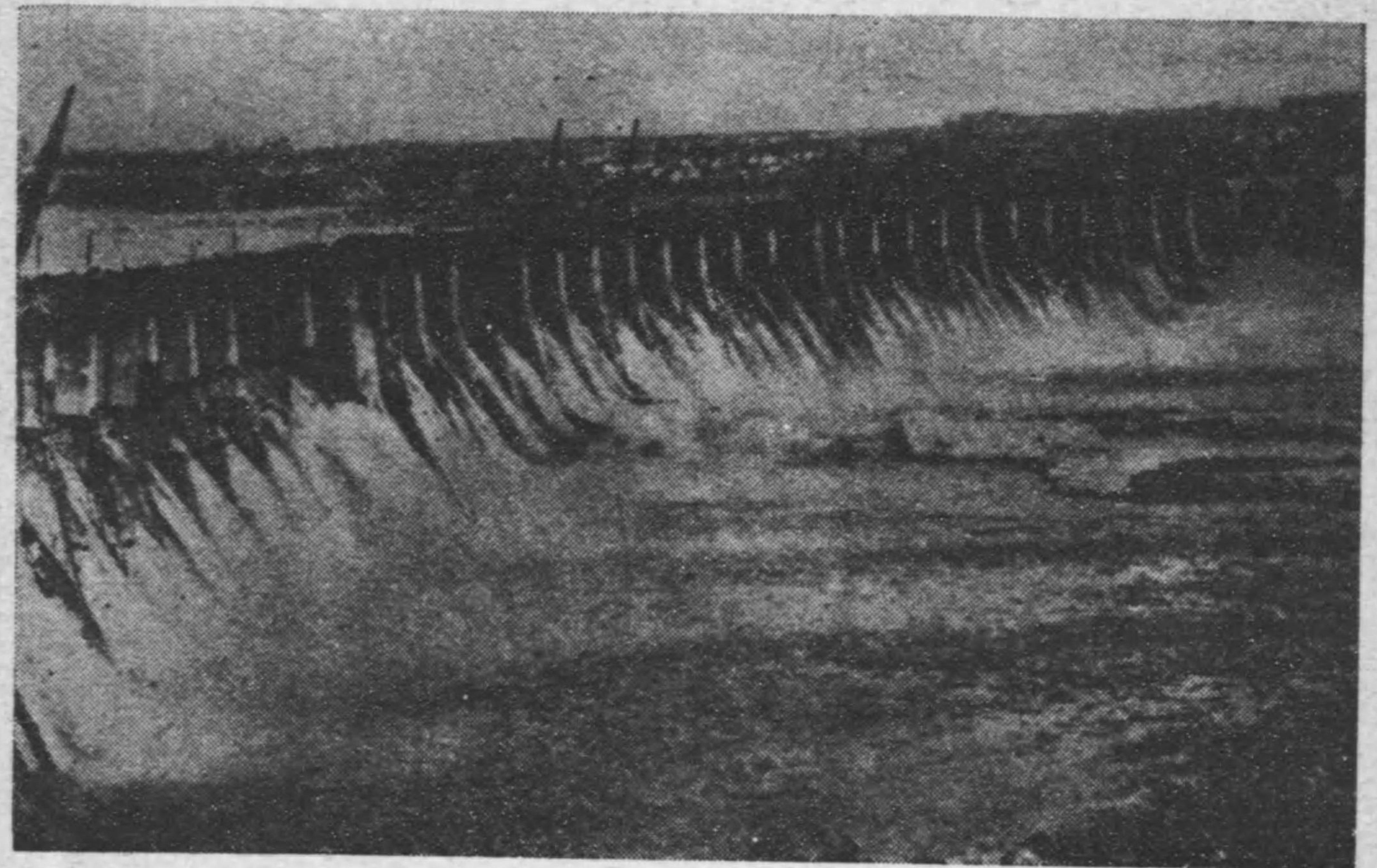
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	チェリアピンスクのトラクター工場	一
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	赤軍の砲兵隊及び自動車砲隊	二
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	ドニエール発電所	三
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	軍備強化ポスターと歩兵隊	四
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	バクラーの大油田	五
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	ANT式爆撃機と騎砲兵	六
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	赤軍觀兵式	七
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	危機に際して	八
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	露國の極東政策	九
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	日滿ソの關係	一〇
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	ソ國の極東赤化運動	一一
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	ソ國の軍備擴張と極東の戦備	一二
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	滿洲國の治安と皇軍の活動	一三
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	日ソ若し戦はゞ	一四
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	東部戦線	一五
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	赤軍極東配置要圖	一六
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	北部戦線	一七
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	西部戦線	一八
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆	外國誌に現れた日露戦争觀	一九



國洲滿。習演河渡るよにトーボムゴの軍赤（圖上頁右）  
。るす要を意注はとこるあで河もれ何北。西。東の  
隊兵砲野軍赤の裝クスマ（圖上頁左）  
隊砲車動自軍赤（圖下頁左）



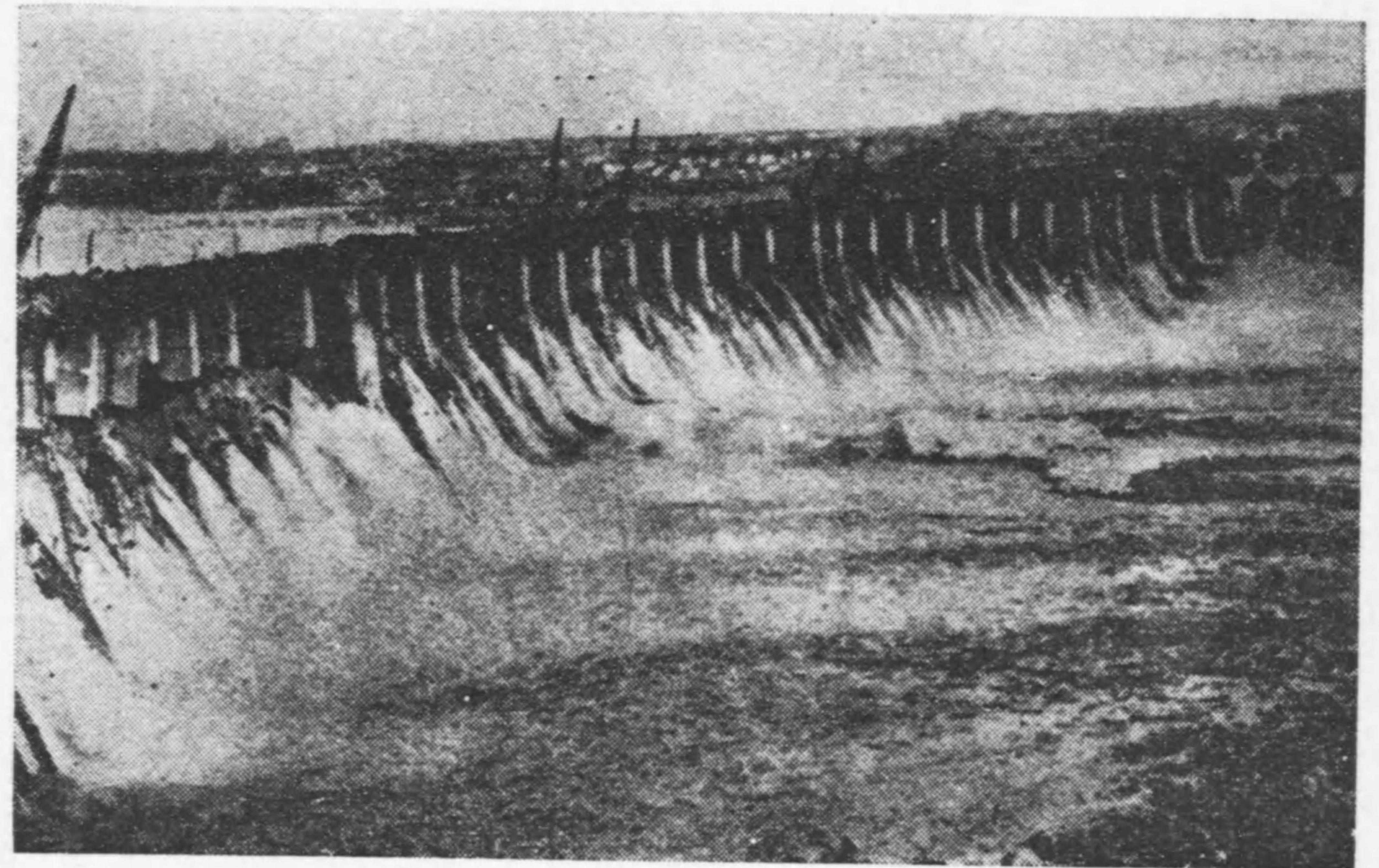
國洲滿。習演河渡るよにトーボムゴの軍赤（圖上頁右）  
。るす要を意注はとこるあで河もれ何北、西、東の  
隊兵砲野軍赤の装クスマ（圖上頁左）  
隊砲車動自軍赤（圖下頁左）



ルブーエニドの慢自も最中の畫計年ヶ五が國ソ (上圖右)  
とんら作を所電發なき大とつもは國ソ近最。觀景の所電發  
。るゐてし

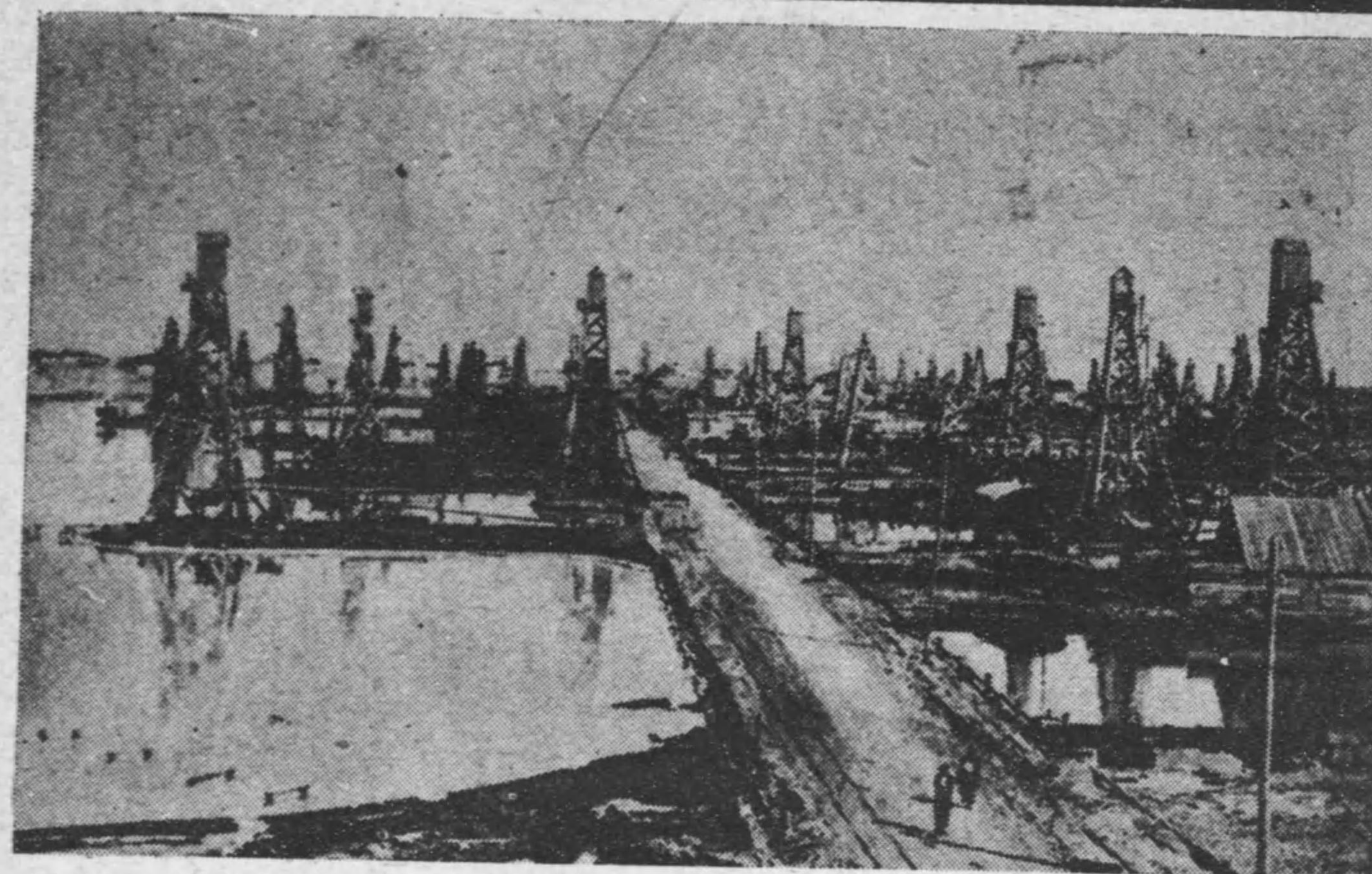
す示をタスポたし調高を化強の備軍 (上圖左)  
、練教)中雪の兵歩の軍赤たけつをクスマ (下圖左)



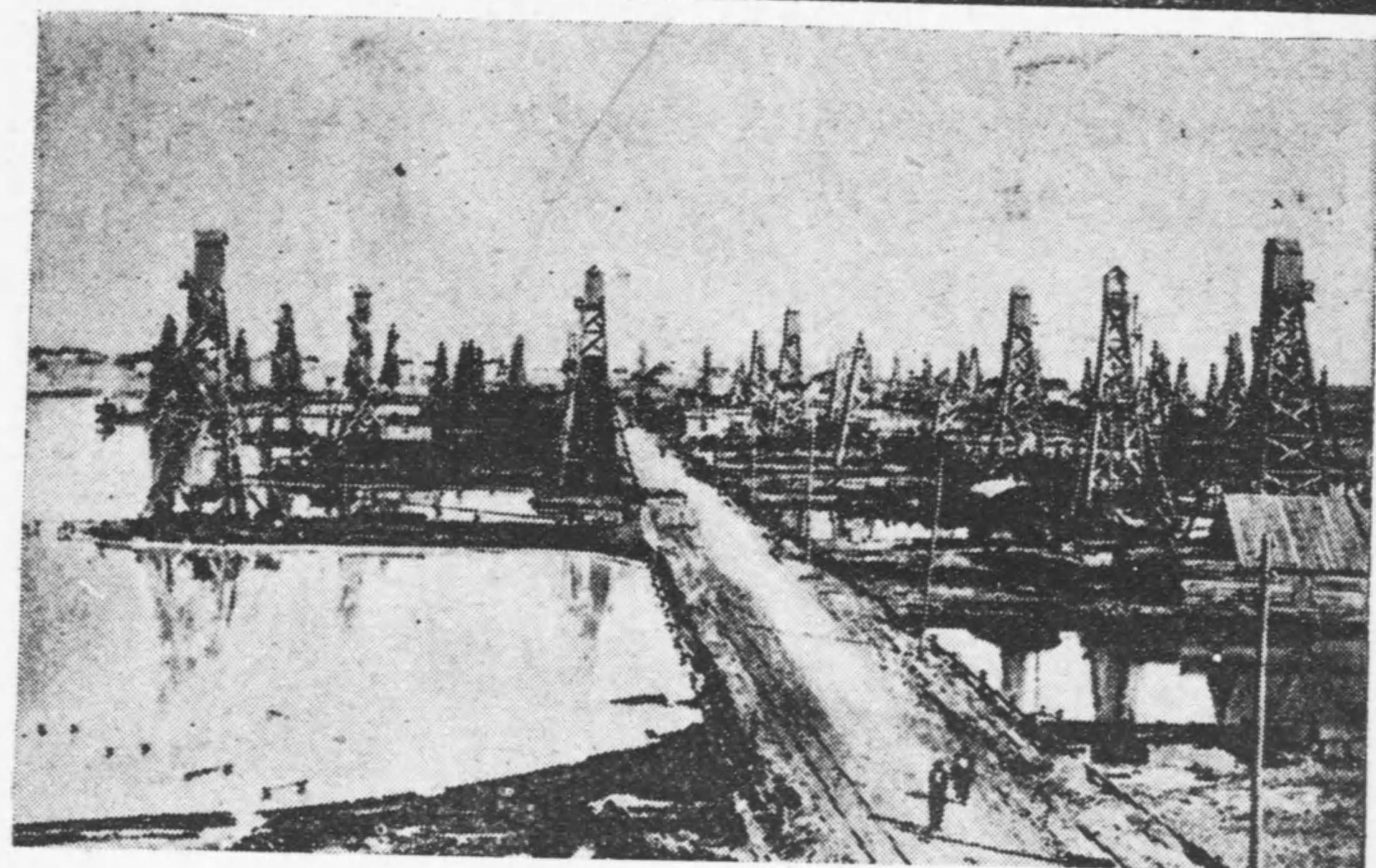


ルブーエニドの慢自も最中の畫計年ヶ五が國ソ (上圖右)  
とんら作を所電發なき大とつもは國ソ近最。觀景の所電發  
。るゐてし

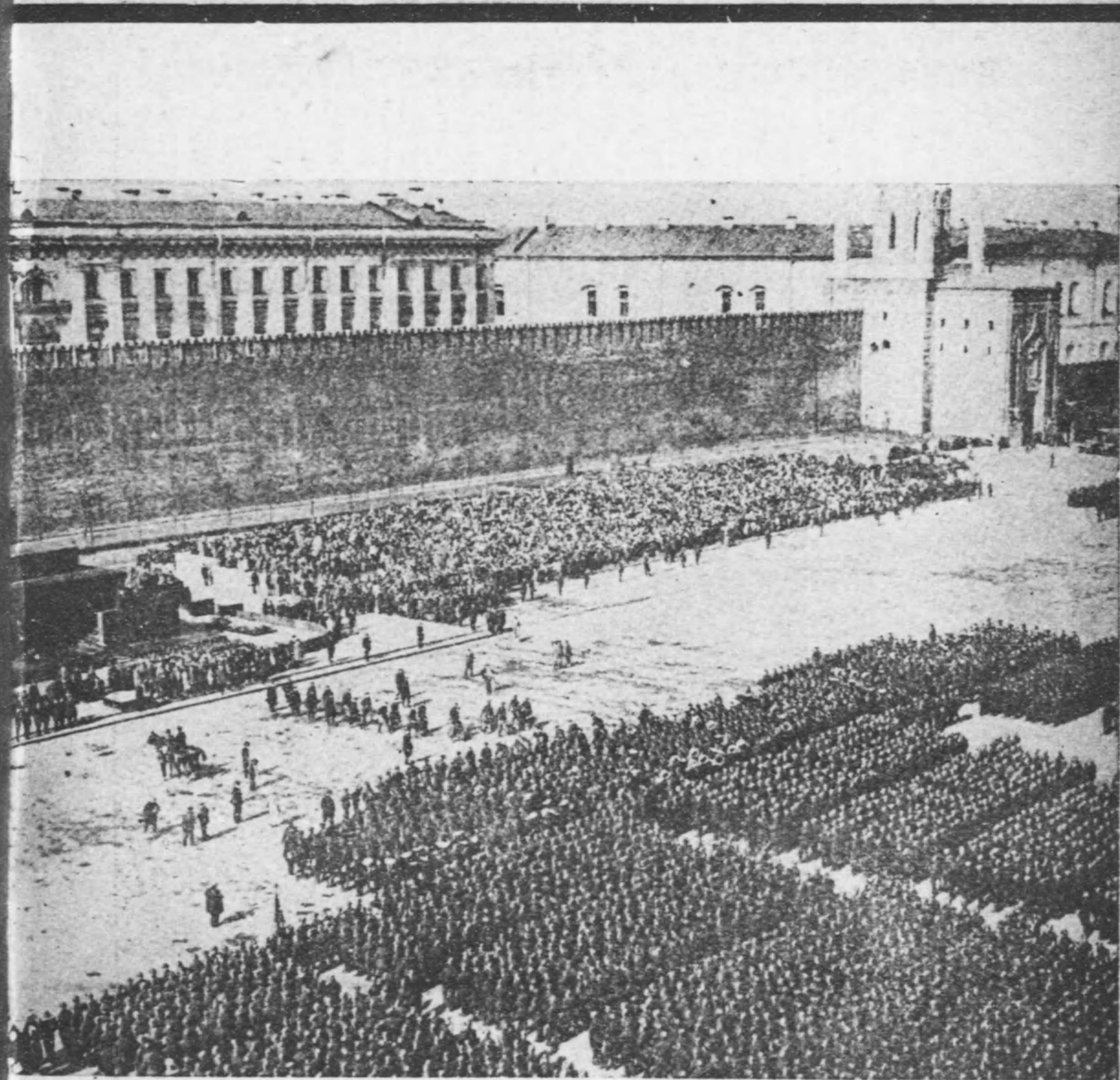
す示をタスポたし調高を化強の備軍 (上圖左)  
、練教)中雪の兵歩の軍赤たけつをクスマ (下圖左)



大でま港の海黒らかいこ。観壯の坑油石ークバ（圖上）  
 來に國我近最。るれまこぎ注に船汽接直きひを管鐵なき  
 。るあでれこ皆は油露る  
 本日。機爆重超式 TNA つ一の慢自御が國露（上圖左）  
 るあでれこはのるすとんは襲を地要主が我てえ越を海  
 軍進の隊砲兵騎（下圖左）



大でま港の海黒らかいこ。観壯の坑油石ークバ（圖上）  
 來に國我近最。るれまこぎ注に船汽接直きひを管鐵なき  
 。るあでれこ皆は油露る  
 本日。機爆重超式 TNA つ一の慢自御が國露（上圖左）  
 るあでれこはのるすとんは襲を地要主が我てえ越を海  
 軍進の隊砲兵騎（下圖左）



りあ萬十三百備常は軍赤。式兵觀の軍赤るけ於に場廣色赤ーコスモ  
だ一界世はで數兵

## 危機に際して

一九三六年の危機が目前に迫つて来る。  
米露は握手して、米露は露國に、  
露國は米露に我國を  
たゝかせやうとしてゐる。

一九三六年、即ち昭和十一年を中心とする前後の二三年が日本にとって未曾有の危機と云はれるのはなぜであらうか。その理由は大體次のとおりである。

その一は昭和十年の海軍軍縮條約改訂會議に伴ふ危機であり、その二は昭和十年三月に於ける國際聯盟の正式脱退に依る滿洲國問題の蒸しかへしと、南洋委任統治諸島の返還問題であり、その三はソヴェートロシアの第二次の五箇年計畫完成の軍備強化に基づく、極東への積極的進出であり、その四は英國の大規模なシンガポール軍港の竣工による南方よりの脅威であり、その五は我が

商品の世界市場への進出に對する各國の、露骨な壓迫である。

以上は今や一團となつて我國へ襲ひかゝらんとしてゐる。わけても米露の握手によつて露國は米國をして太平洋より、米國は露國をして大陸より、我國をたゞかんとしてゐる。

しかしてこの危機は我が國防線の鞏化によるの外防ぎ得ないのである。

全國民の團結によつて、相手に些かの乗すべき隙を與へずこれを突破し、未曾有の危機をして國運の躍進期ともなすことが出来たら幸ひである。

もとより彼等にして不純な野心を露骨にして挑戦して來れば東洋平和のため敢然立つだけの用意は忘れてはならぬことは勿論である。

ともあれ

備へあれば憂ひなし

備ふるものに榮えあり

との標語を提示して、全國民一致、この危機の突破に全力をつくしたい。

## 一九三六年と日本の危機 赤露の脅威

### 日ソ關係の検討

#### 露國の極東政策

ロシアが極東に、その勢力を扶植しやうとしてゐることは、ペートル大帝以來の傳統的宿志であつて、現ソヴェート聯邦となつても少しも變るところがないのみか、ソ聯邦建設者であるところのレーニンは、

「吾人の運命は東方に於て決す」

とまで遺言して死んでゐるのである。

ロシアは帝政時代シベリヤを経て、當時、支那領土であつた沿海州を奪ひ取り、浦鹽に港を開い

たが、此處が冬季凍結のため用をなさないことを知ると、更に滿洲への進出を企てた。

我國は明治二十七年の日清戦争の勝利によつて遼東半島を得たのであるが、これは間もなく露國を始め獨逸、佛蘭西のいはゆる三國干渉によつて、清國に還附せしめられたのである。

當時我國は日清戦役直後でもあり、國力まだ十分でなかつたので、涙を呑んでこれを手離すのやむなきに至つた。ところが間もなく露國は、この遼東半島を一兵も使はず、ほんとの外交の口先のみで手に入れ、これに大連、旅順等の港を設けて不凍港を得る目的を達したのである。

その後露西亞の魔手は南北滿洲はおろか朝鮮にまで延び、我國の存立を危ふくするに至つたので、我國は敢然立つてこれと戦つた。これが日露戦争である。

この戦役に我國は十餘萬の生靈と二十餘億萬圓の國帑を犠牲としてこの結果樺太の南半分と、南滿洲に於る鐵道その他の利權及び遼東半島の租借權を得た。日露戦争後、露國は歐洲方面に於いて世界大戦への参戰や露國との葛藤、國內の革命騒ぎが打續いてゐたため、極東方面を顧みる暇がなかつたのであるが、レーニン、トロツキー等の手に依つて、ソヴェート聯邦政府が成立するに及

び、約十年にして國內の状態は大戦前と大體同様になり、更に第一次五ヶ年計畫を立て、國內の工業化を圖り、今や第二次五ヶ年計畫によつて農工業、軍備等の整備、發達著々と實現し、更に目下努力しつつあるのである。

### 日滿ソの関係

ソヴェートロシヤが滿洲事變中にとつた態度はどうであつたかと云ふに、表面は中立の態度を保持してゐたので、チ、ハル、ハルピン、コロンバイルの戦鬪に於ても幸ひ事なきを得た。尤もこれは我が關東軍が慎重な態度をとつてゐた事もその一つの理由であるが、露國も國內の事情から手が出せなかつたと見るのが至當であらう。由來北滿の地はソヴェートロシヤの勢力範圍内であつて、目下問題となつてゐる北滿鐵道の如きも露滿共營といふのは名ばかりで、その實權を握る幹部は恰んどソ國人（以下露國を）であり、昭和四年以來特にその權力は加はつた。

而してこの北滿鐵道の延長は、丁度内地の青森から下關までに匹敵する長い線であつて、滿洲國

主權の確立と共に従來の露支協定は當然引繼がれて、經營にも折半的權利を有してゐるに拘らずソ國側の幹部は事毎に專横の處置が多く、米國製の優秀機關車九十輛、及び客車、貨車等併せて約三千六百輛といふものを、自國內に引入れたまゝ返還しないのである。これが返還を要求するのは滿洲國側としては當然であるが、ソ國側では自國の財産であることを主張し、この要求に應じないのである。

この外、主權國である滿洲國が運賃國幣建、實權の均等化等の當然の要求をしてもこれに眞面目に取合はないのみか、前述のやうな車輛盜送といふやうな不正な事件があるので、ハルビンに於けるソ國側幹部職員並に滿洲里、ボクラニイチナヤ驛長の召還取調べとなつた。

更にこの長い北滿鐵道は目下のところ、滿洲に於けるソ國側の有力な足場として赤化宣傳の根據となつてゐるのである。皇軍の將兵が屢々、輸送中、列車轉覆事件のため死傷者を出して居るのも背後にはこうした赤化的活動があるのである。

しかしながら日滿提携による滿洲國の健全なる發達はソ國側をして、著しく不安の念を増大せしめたことは勿論で、北滿鐵道讓渡の意志を表示して來た。しかしこれも一説にはこの讓渡價をなるべく高額にしてこれを國內五ヶ年計畫の充實に充てるとの話もある。東京に於ける北滿鐵道讓渡會議は價格見積の相違その他の問題で目下停頓中である。

そもそもソ滿國境線は蜿蜒九百里の長きに亘つてゐるのであつて、この國境線が大小各種の事件を起してゐる事は止むを得ない事である。即ち日本内地のやうな海國と違つて、地續きに外國を控へてゐるのであるから、逃亡、密輸入といふやうな不心得者は、一年中繰り返されて居り、又それをよい口實にして、滿洲國內を不法に射撃するのである。

これは歐洲諸國間に於てさへ屢々ある事であるが、特にソ滿國境に於ては白系露人、又は勞農政府の壓迫に堪えかねて逃亡して來る者、或は不正入國即ち、密輸入の目的の下に入つて來る者が、ソ國の國境監視隊即ち(ゲ・ベ・ウ)の手にかゝつて銃殺されるので、その人數は小さな町に於ても一年間に數十人を算するとの事である。

又滿洲國側としては僅かにその主要接觸地帯である、滿洲里、三河と黒河、ボクラニイチナヤに

のみ國境警察隊がゐるのに拘はらず、ソ國側は國境線至る所に監視隊がゐるのであつて、若しも滿洲國側へ侵入し暴虐を働くとしてもこれは易々たる事なのである。

最近に於けるゲ・ベ・ウの滿洲國部落襲撃等はこの一例であつて、その外暗夜に乗じて滿洲國側に侵入、地勢、森林の状態を探知して、開戦の場合に備へつゝあるのである。

### ソ國の極東赤化運動

ソ國は現在どんな工合に、レーニンの遺言を實行し、極東方面に赤化の魔手を伸ばしつゝあるであらうか。これを検討して見ることは時節柄大いに意義があるのである。あなたがち、ソ國軍隊ばかりが我等の敵ではない。その赤化的魔手こそは人體を腐爛せしめるリペリツトの毒瓦斯よりも、熱度四千度を有するテルミツト弾よりも、恐るべきもので、これがため戦争の最大要素である國民精神を麻痺破壊されて、背後よりの崩潰せられるに至るのである。

ソ國の極東赤化運動は如何かといふに、高架索、中央亞細亞は云ふに及ばず、廣大なる外蒙古の

如きも、殆んどソ國の屬領と同様であつて、外蒙古共和國となつて居り、アフガニスタン、西藏方面でも英國の勢力を驅逐し、更に印度二億の大衆にも呼びかけて、英本國との離間を圖り著々赤化の戦線を進めてゐるのである。

又北京から千五百里もあり、これに達する唯一の交通機關は馬であるといふ廣大な新疆省に對しても、その接觸地帯にトルキスタン鐵道を敷設すると共に、赤色侵略を敢行してゐるのであるであつてその勢は侮るべからざるものがある

最近報ずるところによると、蘇炳文、李杜等の滿洲事變の際、ソ領に遁入した支那兵三千人をトムスクに於て赤化教育を施し、これを先頭に立たせて、進略せしめてゐるとの事である。今や新疆は第二の外蒙古として、ソ國の勢力範圍となりつゝある。

更に赤化の魔手は甘肅に延び、江蘇省を経て支那本部にも及んでゐるのである。

即ちソヴェート現政權と一心同體である第三インターナショナルの支部は上海に設けられ、支那本部に於て一九二六年には約二三萬に過ぎなかつた共產軍は今や約三十五萬人の多きに達し、支那



中央部では湖北、湖南、甘肅等約十省はソヴェート區域となり、江西省の共産軍は福建省にも進入した。

又四川省も危いといふので、蔣介石は六十萬の大軍を率ひてこれを討伐してゐるが、その成功は困難と見られてゐる。

最近の報道によると江西の共産軍はこの頃獨立を宣言した福建の新政權と結託して、一層その勢力を増大せんとしてゐる。

支那の福建と云つてもピンと来ないが、我が臺灣とは目と鼻の對岸である。

又北支那方面では、蒙古から察哈爾を経て、例の馮玉祥を通じて張家口あたりまで赤化の手がさし伸ばされんとしてゐる。

一體支那に於る赤化運動は約十年前程前、ソ國のカラハン及びポロヂンが支那に來て指導したもので、特にポロヂンが廣東に於て、共産黨式の軍事教育を施した事が、今日の原因となつた。その後ポロヂン等の歸國と共に一時火の手はおさまつたかのやうに見えたが、當地の生徒によつてこの時

の芽が今各地に盛んに萌えつゝあるのである。

このポロヂンこそは今ソ國極東軍司令官として、「日本何者ぞ」と頻りに對日強硬氣勢を擧げてゐる、ブリユツヘル將軍その人の假の名であつたのである。

ソ國が歐羅巴の英、佛、伊、獨等に於てなした、赤化運動は各國の峻嚴な擊退に會つて、手も足も出ずになり、仕方なくその銳鋒を近東のトルコ、ベルシヤ、アフガニスタン、印度より更に極東方面に轉じて來たのであつた。

極東に於ける、この赤化の矢表に立ち得るものは我國を於て他にないのであつて、この點歐羅巴方面に於ては數箇の強國が對抗したのと違つて、我國のその責務は極めて重大なのである。

### ソ國の軍備擴張と極東の戰備

ソ國の第一次産業五ヶ年が工業化に重點を置いてゐた事は、軍備の充實に役立ち、一名を軍事五ヶ年計畫とも云はれるのであつて、現に自動車、トラクターの如きも一日によく百臺以上製作能力のある工場を有するとの事で、これ等が一朝開戦の場合軍用に早變りすることは勿論である。特に

チエリアピンスク工場で出来るアヒル型のトラクターはタンクとしての性能を立派に具備してゐる  
との事である。又飛行機の如きも従前は外國から買入れてゐたのが、今では、A・N・T式の如き自  
國産の優秀機がどん／＼出来るやうになつて、(一)最近も百二十八人乗といふ程ろしく大きな飛行  
機が墜落した事を傳へてゐるが、これなど世界稀に見る大きなものである。

今や第二次五ヶ年計畫を鋭意進行中であつて、これは昭和十二年には遂行せられる事となつてゐ  
るが、その結果軍備は一層機械化し、鞏固擴張せられる事となるのである。

最近も、國民が食ふや食はずで苦しんで居り、ウクライナ地方の飢饉の如き大被害があるに拘ら  
ず、いはゆる鐵の規律を以て、一向にお備ひなくどし／＼大規模の軍事擴張を斷行し、昨年度に於  
ても歩兵四箇師團、騎兵一箇師團の増設を行ひ、飛行機の如きも晝夜兼行で製作増加し、毒ガスの  
研究と製作とは米國と相競ふ盛んさで、化學戰部隊は凡ての軍團に配置せられてゐる。現在の總兵  
力七十六箇師團、飛行機二千二百臺、戰車一千六百臺と見られてゐるのであるが、斯くの如き軍備  
の擴張強化は何の目的に使用せらるゝのであらうか。恐らく「強大なる軍備の力を以て世界赤化の

目的を達せん」といふ意圖にある事は勿論であつて、第二次五ヶ年計畫の遂行によつて國內の整備  
が完成した上は當然この目標への突進となつて現れて來るであらう。

ソ國が滿洲事變以來極東に集中した兵力は約十一萬人(十數箇師團)と目せられてゐる。我が日  
本帝國平時の兵力が二十三萬人であることを考へると、この約半數に等しい軍隊が滿洲國の周圍を  
包圍してゐることとなるのである。

この外、飛行機も約三百臺、戰車が約三百臺配置されてゐるのである。この中には超重爆撃機が  
數十臺用意せられてゐるのであつて、この超重爆撃機は約七トンの爆弾を積載し得るとの事である。  
三トンの焼夷弾が風の日に東京へ撒かれると、かの大正大地震の時のやうな惨害を與へ得る力の  
あることを知るとき、如何に威力が大であるか想像出来る。而してその航續距離は二  
千五百キロに及ぶとの事で、これを浦鹽東京間が千キロの距離、往復二千キロであることを知るな  
れば、臺灣を除く日本全土はその猛害を蒙むる行動範圍下にあることになるのである。

この外吉林省東部國境、黒河對岸、黒龍、松花兩江の合流地點、滿洲里等には永久的な築城をなし、最近は日露戰爭後手を入れた事のない浦鹽の砲臺を改修しつゝあるのである。

これに對する一挿話として、日本からこの兩三年對露的に多量輸出せられてゐた、セメントが、皆築城の材料になつてゐたなどといふ事で、最近漸く氣づいて中止したなどといふ話もある。潜水艇も陸路輸送され、既に六隻は完成し、後數隻は目下急に組立中であるとの事である。

この潜水艇の威力たるやよく通商貿易及び海上軍事輸送線を脅威するに十分であつて、世界大戰當時一、二隻の獨逸潜水艇が現れても、その犠牲が多きく、且つ多數の護衛軍艦を必要とした事でも判る。若しも事ある場合この潜水艇が日本海はおろか、太平洋方面へでも、出沒するやうな事になると、わが貿易線は脅されてそれこそ大變である。この外ドックを改修するとか、極東の都市には防空、防毒演習を行ふとか積極的な準備を進めてゐるのである。

又シベリヤ鐵道の復線工事を急ぎ、又南方併行線をつくり、バイカル迂回鐵道を計畫し、イルク1クまで來てゐた航空線をウラチオまで、延長し極東方面の軍事輸送能力に萬善を期してゐるので

あつて、そのやり方は極めて大仕掛である。

極東の戦時に備へるために毎年數萬の除隊兵を滿國境に送り、共營農場を營ませて、警戒を嚴にし、いはゆる武裝移民としたのである。同時にこれまで國境附近にあつた農民を、強制的に後方へ移住せしめた。

この外從來ドン河の流域にあつた工業中心地帯を漸次ウラル以東のチエリアピンスク及びスウエルドロフスクに移しつゝある事も、一朝極東に事ある場合の用意と見る事が出来る。

以上の如くソ國は極東方面に積極的軍備擴張をして居り若しも我が日滿兩國の連繫に些かの弛みでもある時はその弱點を衝いて來らんとしつゝあるのである。

特に西歐羅巴方面に於て關係諸國と不可侵條約又はこれに等しい條約を締結し、又最近米國との復交を見るに及んでその鼻息は一層荒いのであつて、過ぐる十一月六日のモスコの革命記念式に於ても、ソ國の首相モロトフは豪語して曰く、

「今や赤軍は對日本戰爭に於て必勝の準備あり」と述べてゐる。

又本年一月事實上の主権者スターリンは「鞏化せる赤軍の矢表に立ち得る何れの國の軍隊ありや」と呼號してゐる。これは二三年前であつたならば或は恐日にもとづく惘惘とも見る事が出来るが、現在では相當の實力を有し、しかも歐洲諸國との危機が解消せられた有利な立場にある以上、或ひはその勢ひに乗じて、進んで自ら提唱してゐた不侵略定義を擲ち、敢へて他國攻略策をとるに至るかも知れないのである。これは子供が切れる刃物を持つと無暗にこれを使つて見たい衝動に驅られるのと同じである。

事實上の権力者スターリンは、その掌中に軍隊と警察を兼ねたやうなゲ・ベ・ウ十五萬をしつかり握つて、牢固として抜くべからざる實力を有してゐる。泣く子もその名を聞けば黙るといふゲ・ベ・ウに一度睨まれたが最後、何人と雖もどうすることも出来ないのである、彼のトロツキー、ブハーリン、ルイコフ等の最有力者の失墜はこれを裏書して餘りあり、現在事實上陰口一つきく事が出来ない。又最近に於ても黨内の反ソヴェツト分子の大掃蕩を行ひ、今やスターリンの威令天下に偏く、その計畫は善惡を問はずどしどし實行せられてゐるのである。

最近に於けるウクライナの飢饉の如き夥しい犠牲者を生じたのに拘らず、不平分子をピタリと抑えると共に一方には大工事を進めて、北緯では白海とバルチック海を通ずる大運河が開通し、更に世界第一を誇る、ドニエール発電所に優る新發電所を目論み中との事である。なほこの大運河開掘には囚人が主として使用されたとの事である。

こゝで一寸囚人の事を述べるが、刑務所内の作業等も主として軍用品が多く、しかも八時間交代による晝夜兼行であつて、一時間に五分の休みしか與へないので用便にも不自由だとの事であつて競争的に仕上げ高をつりあげる方法をとつてゐる。

この仕上競争制度は何れの事業にも行はれ、毎日成績を公表し豫定以上の能率を挙げたものには稱讃激勵を與へるのである。この制度は工業方面ばかりでもなく、ソ國の國家的活動の原動力ともなつてゐる、鐵及び石炭の採掘にも適用せられてゐるのである。事實映畫等によつて見ても炭坑内の労働者は血眼で働いてゐて、よくもあれで精力が続くと思はれる程である。而して工場労働者はタツタ一日の缺勤、遅刻三回でくびになるとの事である。

斯くの如く自由あつて自由なきが如く、精神的な獎勵のみによる制度に反感を有するものも少く

ないことは事實である。又國內の大半を占むる農民中にも、農業の公營化、集團化に反對する聲が多く、種々の物質も國內で充分生産されながら、五ヶ年計畫の資金欲しさの無理な輸出によつて缺乏してゐた事も事實である。最近の歸朝者の話にビフテキ一つが日本貨で三十五圓大根一本一圓とられたとの事である。

ソ國の政府はこれを我慢させ、國內に充滿した不平不満を抑へるためにも強力な軍備が必要なのである。

即ちそれに萬一外國と戦端を開き、敗けるやうな事があると不平分子の擡頭となり、國內の動搖を來すので彼等は軍備をあらん限りの力によつて鞏化し、意地にも負けられない立場にある。

又過ぐる滿洲事變中の對日強硬論者は特にその軍部ともいふべき、赤軍最高級司令官ウオロシロフ將軍であり、前述の極東軍司令官ブリユツヘル將軍であつたといふ話は、如何に彼の軍部が自信? を抱いてゐるかがよく判る。

而もその軍隊は勤勞者のみを以て組織し、その多くは數度の革命戰 銃火の洗禮を受けた古強者であるのである。

その兵員の素質は朴訥、鈍重、特に防禦に於ては命ぜられた場所は死ぬまで、守るといふ性質を有してゐるので、守備にかけては世界一であらうと云はれてゐる。

兩三年前までは機動戰に不得手であり、指揮官の素質如何が論ぜられたが、今日に於てはこれ等の缺點は補はれ、侮り難い一大勢力を形づくつてゐるものと推察される。

兵器に於ては前に述べたが如く五ヶ年計畫の工業化に伴つて進歩し、タンク及び飛行機の大量生産が實現せられると共に、機關銃、自動拳銃も火砲等も優秀なものが製作されるやうになつた。

兵制中特に機械化する騎兵集團に重きを於て居る事も特筆すべき事である。

ソ國は將來の戰爭は軍事の外經濟戰、思想戰にあると稱して居り、特に思想戰に重きを置き敵國の後方擾亂に現政權と不可分の關係にある、第三インターナショナルをして活躍せしめてゐるのである。滿洲事變中にもこの徴候があつた。我々はかゝる内通的不純分子は平時戰時を問はず、根絶しなくてはならない。

先年支那がソ國北京大使館に手を入れた際、彼等が支那の共産軍に對して供給した、或一年間の兵器は次の通りであつたと云はれる。

飛行機	三臺
火砲	三八門
機關銃	一四七基
小銃	二六、五〇〇銃

の多きに達して居り、指導者として

高級指揮官	五人
各兵器指揮官	四十六人
司令部員	十一人
政治勤務員その他	二十人
合計	八十二人

が潜在して支那赤化の尻押しをしてゐた事實もあつたのである。

かゝる實例を見る時、如何に巧妙なる赤化運動の助長方針が相手國に向つてとられてゐるかといふことを知り得る。

斯くの如くであるから、我が對滿政策は確固不拔な方針の下に、行はれなくてはならぬ。

若しも少しの弛みでも出来れば乗ぜられる恐れがあるのであつて、その堅固なる事を知つて、齒が立たないと見ると彼等は積極的な進出を、次第に斷念し他方面に轉換するに至るのである。これはソ國のこれまでの實際に徴しても明らかである。

### 滿洲國の治安と皇軍の活動

最近滿洲國の治安が著しく良くなつて、皇軍に對する心からなる感謝の聲が、滿洲國人の間に擧つてゐる。

即ち昭和七年秋に於ては二十一萬餘を算した、兵匪、土匪が、昭和八年六月の發表によると、約六萬人に激減してゐる、尤も匪賊の數は高粱繁茂期である夏季に於ては増加するのが例である。又

南滿鐵沿線の如きは恰んど平靜に治安が維持されてゐるのである。而して滿洲國は我が國の二倍半にも及ぶ廣大なる地域であつて、この廣範圍の警備に當つてゐる皇軍は、僅々二三の師團に過ぎず、行動に困難な未開の山野が多いのでその困苦は推察に難くない。而も夏季に於ては時に百四十度に達する酷暑と闘ひ、冬季に於ては零下四五十度といふ内地に於ては想像の出来ない嚴寒に打ち堪えて不眠不休、しかも一言一句の不平等も洩らさず警備に當つてゐるのであるから我々國民は深い感謝を捧げなくてはならない。近來滿洲事變當時に引替へ第一線の將士慰問の實があがつてゐないやうに見受けられるのは誠に遺憾である。

### 日ソ若し戦はゞ

今や我國は國を擧げて滿洲國の開發に努力してゐるのであつて、出先の當事者に於ても、茲十年位は専心にこれに當るべきものと觀られて居り、我國からソ國に進んで事を構へる等の野心のない事は勿論である。

随つてソ國側の發表する怪文書事件であるとか、日軍飛行機のソ領侵入とか、日本驅逐艦二隻の撃沈とか、根も葉もない虚報が誠にやかに傳へられてゐるが、これは一體ソ國側の國內策であるか、恐日に基づくものか、侮日に基づくものかはよくわからないが、ソ國側幹部の鼻息が最近頃みに荒くなつたことは事實である。

もしもこの鼻息が、鼻息だけでなく、腕まくりとなつて、先方から打ちかゝつてくるやうな事になれば我軍もやむなく立たなくてはならない。

重ねて云ふが、戦争は國を擧げての重大事で輕々しくこれに動くべきでなく、まして我が帝國が世界の平和を愛好し正義に基づく政策を實行しつゝある現在に於て、好んで他國を侵すやうな事のない事は勿論である。

以上でソ國の極東政策の概略を述べたが、これが前述のやうな萬一、ソ國の不法的侵略となり、兩國の開戦が起つたと想定した場合兩軍の行動はどうなるであらうか。ソ國は急速に相手方へ侵入せんとするであらう。現に赤軍の總司令官ウオロシロフ將軍が「吾人は他國境線外に於てのみ戦ふ」と明らかに宣言してゐる。

### 東部戦線

先づ地圖を展いて見ると、蜿蜒九百里の國境線を相接するソ満國の東端の向ふ側は沿海州でウラジオストツクがある。これからシベリヤ鐵道に添ふて少しゆくと、ニコリスクに着く。北滿洲鐵道はこゝから西に岐れてゆく。が、この線に添ふてグロデコヤがあり、ソ満國境にはボクラニーチナヤ（滿洲國）がある。この邊は幾重にも永久的な築城が施されてゐる。

ニコリスクから少し北に行くと興凱湖の近くにスパスコエがある。

このスパスコエには歩兵師團の外極東軍第一の有力なレーニン飛行隊があつて、赤軍の誇るA・N・I式超重爆撃機が、さと云へば滿洲朝鮮は勿論、遠く日本海を越えて、東京始め臺灣を除く内地主要地を襲撃せんとしてゐるのであつて、この超重爆撃機の外百數十機が待機の姿勢にあるのである。

このスパスコエにあるスターリン師團には、東洋人の兵も含まれてゐるとの事である。而して豆滿江を隔て、朝鮮の北部に接するボセツト附近からウラジオ、ニコリスク、グロデコ



極東露領軍備概圖 (太き黒線内は集中地方を示す)



ヲ、スパスコエを含む地方には少くも三四の師團と、戦車及び砲兵を含む機械化兵團、毒ガスの化學戦隊、ソ軍が自慢する騎兵集團、飛行集團（これはスパスコエの外ウラジオ、ボセツトにもあるものやうである）が命令一下滿鮮の地へ進路せんとしてゐる。

朝鮮の北部には雄基、羅津、清津等の港が日滿兩國をつなぐ新しい近道として、萬一の場合には軍隊や軍需品の輸送連絡地となつて居り、仲々大事な場所である。然るにこの北鮮に近いポツト方面には空軍、騎兵を含む軍事施設が極秘裡に行はれてゐるのである。

以上の東部戦線で敵の挑戦があれば、先づ空軍の活動となるであらうが、さうなれば我が飛行機は何を於ても敵の空軍根據地を破壊して、禍根を絶つ手段に出なければならぬ。特にソ國側は出来るだけこの地方で攻勢に出て、黒河、コロンバイル方面の我が軍の背後を脅すに相違ないからである。その他海軍と協力して港内を攻撃し、舊式ではあらうが二三の敵砲艦と十數隻の潜水艇が日本海へ暴れ出し、我が輸送線を脅かすことのないやうにしなくてはならない。

これに對して修築されて、面目を一新したルスキー島ロシヤ島その他の陸上の十數箇所の砲臺は

一齋に應戰の火ぶたを切るであらう。

ウラジオは「第二の旅順」としてどの位な守備力を有してゐるか、わからないが、以上のやうな嚴重な、配備を見ると、陸に海に空に壯烈な戦ひが開始される事が想像される。

而して旅順の時になかつた飛行機が彼我入亂れて闘ふであらうし、毒ガス弾が威力を發揮するであらう。又タンクがこのこと暴れ廻ることであらう。かくて幾許かの時日の後、結局は日章旗がウラヂオ街頭に翻るのであるまいか。

### 北部戦線

ニコリスクから略々直線に、ウスリ河に添ふてイマンを経て北進すると、シベリヤ鐵道が西に折れて西進する曲り角にハバロウスクがある。こゝはウスリー河と黒龍江の兩大河の合流地點で、彼のブリツェル將軍の極東軍司令部がある筈であつて、相當の兵力がこの附近に駐屯して居り、この部隊は松花江を遡り、ハルピン方面へ進出を志すかもしれないが、これは我軍に機先を制せられるであらう。

この松花江とウスリー河との間に突出してゐる。滿洲國のいはゆる三角地帯は、シベリヤ鐵道に添つてゐるので敵襲を蒙る怖れが充分にある。

特に東部の興凱湖近くの密山、ウスリー河を隔て、イマンと對する虎林及び松花江との黒龍江との合流地點あたりはその危険が多い。

この松花江流域の佳木斯附近には、我が武裝移民村が三ヶ所程ある筈である。

なほシベリヤに於ける追撃戦になつた場合は、往年のシベリヤ出兵の時と同様に、赤軍ではバルチサン式戦法で、わが後方攪亂をやるかもしれないし、シベリヤの雪原に慣れた彼等が、橋やスキ一部隊を組織して、奇襲して來るかもしれない。

こゝで我々が熱望してやまないのは、この三角地帯への急行路として北滿鐵道の國境近くの小城子あたりから密山、虎林方面に達する一線と、ハルピン附近から松花江添ひに三姓を経て樺川、富錦、同江方面への一線の鐵道が早く敷設されることである。さうすればこの方面の危険は薄らぐであらう。又現在は旅客機、自動車、松花江を利用する船便が松花江方面への交通機關となつて居るが、従前横行してゐた土匪も今は山深く逃げこんでゐるので、その交通は安全になつた。

更にハバロウスク附近には黒龍江艦隊と水上飛行機の根據地がある。

この黒龍江艦隊は砲艦であつて、ソ滿國境を巡る大河を利用して、我が滿洲國の攻防艦隊と何れは決戦を交へるであらう。

ハバロウスクから西方に當る國境地帯、即ち滿洲國にとつては北部戰線にあたり、一時馬占山がゐたので聞えてゐる黒河の對岸、ブラゴウエスチエンスク及びその後方のポチカヨリオウには、黒龍江師團共約三箇師團の外機械化兵團、飛行兵團、騎兵兵團等の兵團が堅固なる陣地に寄つて構へてゐるのである。

これ等は、いと云ふ場合には一氣に河を渡り、小興安嶺を越へて、チ、ハル、ハルピン方面へ進出しやうとするものであるが、これに對して我が軍は必ず神速な應戰振りに出で、敵を一步も近づけないであらうし、あべこべにこの線を突破し、その背後にあるシベリヤ鐵道を遮斷して、ハバロスク、沿海州方面を孤立に陥らしむ策に出るであらう。然しこの作戦はソ軍側はこの地方に大部隊がゐるから、相當の困難を極めるであらうと想像される。

なほこゝでも作戦上チ、ハルから嫩江を経て、黒河に達する鐵道の急設が望ましく。

## 西部戦線

四〇

さて満洲國の西部は、日ソ衝突の際の主戦地と目せられる満洲里、ダウリヤ邊りのザ、バイカル、コロンバイルを含む廣大な西部戦線である。

而してこの邊りのソ國軍はチタ、イルクーツク、ダウリヤ、ウエルフネ・ウーヂンスク等に歩兵三個師團、騎兵一個師團の外機械化兵團、有力なる飛行兵團があるのである。後續部隊を繰り出すに最も便利であり軍需品の輸送に都合よくシベリヤ鐵道もこれより以西は障害をうける率が少い。満洲國側のこの地方は大興安嶺の西側のコロンバイル地方で草原、曠野地帯が何百里と続き、ハウル、デルブル、ガンの三つの河川が流れてゐるので三河地方とも云はれる。

氣候は夏季を除く外寒冷であつて、十月から翌年の四月までは地下數尺が凍結する。この地方の住民には赤露を逐はれた白系露人が相當住んで居り、蒙古人、滿洲人も多く住んでゐる。

昭和四年八月の露支事件の際、赤露軍は支那軍を撃破してこの地方へ侵入して、白系露人は勇敢に抵抗を試みたが武器が充分でないため、多數の犠牲者を出した。

何にせよその奪取如何で日ソの勝敗が定まると云はれてゐた、その大事な大興安嶺をはるかに越えて我が軍がコロンバイル地方に進出してゐることは、作戰上非常な強味である。

昭和八年春我が軍は蘇炳文、李杜の軍を追つて、この地方に入つたとき、ソ軍はうろたへて騎兵を繰り出し、我が腹背を衝くやうな準備に出た。

萬一の際ソ軍の作戰を想像するに恐らく、この時と同じくその誇りとする機械化騎兵團の一團はスレーチンスク方面からソ滿國境線であるアルグン河を渡つて、我が右翼を掠め腹背を衝かんとするであらう。又中央からも第一線に進撃して來るのはダウリヤに屯ろする騎兵集團であらう。

それに續いて戰車を含む主力軍が三河地方の曠野を目指してやつてくるであらうし、毒ガス彈や飛行機が、活躍するであらう事は東部、北部の戦線以上と見るべきである。

更にその勢力下にある外蒙古方面からも、沙漠を越えて南部方面に出て來る部隊があるかもしれないので南部のハンダガヤ方面も警戒を要する。

ともかく西部戦線こそは滿洲國死活を制する最も重大な戦場となる事は想像に難くない。

砂塵をあげて荒野を猛進して來る敵の騎兵集團に對しては、我が飛行機が、地上すれすれに果敢

なる襲撃を加へるであらうし、敵の機械化兵團に先んじて、我が快速部隊が勇猛神速な活動を示すであらう。

彼我の飛行機は秘術をつくして、壮烈な空中戦を演じ、毒ガスの津波の襲來する中に、人馬共異様なマスクに包まれて相戦ふであらう。荒野の草木をなぎ倒して、縦横にのし歩くタンクが戦場の花形となつて働んであらうし、これに對する特殊な撃退砲がうなりをあげて、戦車の鐵板をはじき飛ばすであらう。

結局彼の鐵血主義が勝つか、我が肉弾主義が勝つか。といふことになるが、我が三千年の歴史に輝く大和民族の一死報國の大信念が彼等をよく壓倒するに至るであらう事を信じてたい。

又ソ國は勢力範圍の外蒙古（内蒙古には赤軍の飛行根據豫定地あり）といふを経て、多倫あたりから、我が熱河省方面へ現れるかもしれないが、これに對しても手ぬかりはないであらう。

而して東部、北部、西部の戦線が相呼應して敵をイルツクイク以西に撃退した時が第一期戦の終りとなるのではなからうか。若しもこの間、敵軍に於て國內に動搖等の勃發、歐羅巴隣接國との國交の險惡化がなく、引續き抵抗に出でるとすれば戦ひは第二期戦となるわけである。

### 外國誌に現はれた日露戦争觀

以上で、大體終りとする考へてゐたところ、本日の朝日新聞紙上に、曾てはレーニンと共にソヴエート聯邦政府の大立物として勢威大いに振つたトロツキーが、（今はスターリン等と意見相容れず外國に居る）米國の有力雜誌「リバーティー」誌上に於いて「日本は自殺するか」と云ふ一文を發表したことが出てゐたので、参考までに次ぎに掲げて、聽くべきものは聽き、辯駁すべきものは辯駁して見る。

尤もこの日本の實狀を無視した文章に對しては、最近感ずるところあり、政友會を脱黨して、舉國一致を叫んでゐる、松岡洋右氏が改めて反駁文を執筆されて「リバーティー」誌に寄稿されるとの事である。

まづその文章を紹介すると

「一體日本人は戦争には決して負けないといふ荒唐無けいな信念を持つて居る。此信念こそ自國の經濟とその社會状態とに一切關係なく、たゞさう信ずるといふ途方もない考へ方なのだ。

日本の支配階級は昔からうぬぼれが過ぎてゐる。さうして彼等は國內的トラブル(困難)は常に攻略的對外問題で譯もなく全部を轉向せしめ得ると考へて居るらしい。最近の例は滿洲國の獨立からその承認といつた事件に求められる。そこでは國際的條約なるものが、嘲笑的に反古にされてしまつた。國際聯盟の調査も遂に物をいはずなかつた。アメリカに彼の重大なる時機に常に經驗する「ウオッチフル・ウエイト」の政策を憧に支持して居る。赤露は大讓歩を以て日本帝國の行動を見守つて來た事により、結論において日本は遂にアジアといはず全世界においていづれの國からも指一本もさへせないといふ事を信じさせる譯だ。

これが彼等の持ついはゆる空想世界である。さてその空想のよつて起るフアクトは何であるか。

彼等は四十年前に支那と戦つてこれを破つた。卅年前にはザーのロシアを滿洲から追うた。これ等は動かすべからざる事實だ。だが今にして考へるとそれ等は寧ろ當然過ぎる程の話であつてかるが故に日本は現代ロシアと戦つて勝ち、他のいづれの一等國と干かを交へても猶勝ち得るといふことは理論において受取り難い。第一に長期戦における經濟作戰に果して成算があり得るか。

どうかもしも疑はしいし、見渡したところ、日本の軍人が近代科學の知識において米露のそれの比較ではない事も勘定の除外ではあり得ないではないか。

第一に日本人の必勝の信念を以て、荒唐無稽の信念と云つてゐるが、これはとんでもない粗忽な見方だ。我國が戦争を開始する時は、東洋の平和及び我が權益が著しく、阻害せられて、我國の存立が危ふくなつた場合に於てのみ、やむなく國運をとして立つのであつて、國民は老幼、婦女子の末に至るまで國家の存亡を意識して、一丸となり火の如き祖國愛に包まれるのだ。随つてその信念が眞剣であり、些かの間隙のないものであることは云ふまでもない。

これは過ぐる弘安の昔、歐亞を席捲せる元の大軍が襲來の際にも現はれ上は皇室より下萬民は云ふに及ばず、宗教家までが熱誠以て護國の信念を溢れ、しかも高野山の僧侶の一團の如きは、矢石の兩飛して爆破する最前線にあつて敢然と、外敵調伏の熱禱を續けること實に百有餘日、しかも凱旋の日にまで及んだのである。宗教家にして既にかくの如し。この報國的信念は數百年を経て今も我が國民の中に、脈々として波うつてゐることを彼に教へてやりたい。

次に「國內的な難事を、攻略的對外問題で、轉向云々」の項であるが、これはそのまゝ鬪斗

をつけてソヴェートロシア國へ返上したい言葉だ。

今ソ國の國內に如何に不平不満が溢れてゐるか。交通の便のよいウクライヤあたりにどうして、夥しい（數百萬とも云はれる）飢餓者や餓死者があつたか。ゲ・ベ・ウの彈壓が如何に物凄いか。そして御大のスターリン氏は、

「五ヶ年計畫の九十四パーセントまでは出来たが、残る六パーセントは日本のために實現することを得なかつた」

と云つてゐる。引合に出される日本こそいゝ迷惑である。これが國內の難事の對外轉換でなくて

なんであらう。彼等は二言目には日本を引合ひに出して、責任の轉嫁を例にしてゐる。

次ぎに「近代科學の知識において日本は米露のその比較ではない」と、恐ろしく勇敢に言切つてゐることだ。

陸戰兵器こそ我國では公表されないもので、はつきりしたことは云へないが、いさふたを開けて見て決して他國にヒケを取つてゐるとは思はない。

ソ國が御自慢の飛行機だつて機械化部隊に於てだつて然りだ。

手つ取り早い話が、現代科學の粹と云はれる軍艦の建造についても英米のめつたに頭を下げない連中さへはつきり、

「日本は世界第一だ」と兜をぬいでゐるではないか、他は押して知るべし、科學的にも頭抜けてゐると信ずることは決して自惚れでない、

「要するに現在日本の大攻略プログラムに、唯一の最後の裁きを與へるものは、日本軍部首腦が現代世界一流の陸軍國との戰爭計畫において、果して誤算なきやの點にある。

「日本は決して戰爭にまけない」といふうぬぼれは遂に現實に打つかつてくじかれ、その迷霧は遠からず晴れるであらう。手つとり早い話が、彼等かもつ過去の戰勝の總ては、悲しいかな現代の強國中にその對照を得る何物もなく、彼等のいはゆる勝利なるものは世界中のもつとも時代遅れの代物との對照に過ぎない。

戰勝の相對的評價は一に其事實によるものであるといふもつともいゝ例がある。昔々の話だが

ザーのロシアは戦へば必ず勝つた。然して彼等は勝利以外の何物をも知らない國民であつた様であつた。この世界最強の大帝國は、もつともよく小學校の書物に描きだされて居た。が、その時既に實際においてはオールドロシアの別な實在が出来あがつて居た。然して當年ロシアがその戦勝の歴史を飾る相手は未開のコーカサス又は内政的に崩れかゝつて居たポーランド、乃至はトルコといった國々との戦争に過ぎなかつたのだ。

日露戦争後七ケ年、大々的に改造されたはずのロシア兵も、世界大戦當時僅にオーストリーに對ちし一朝ドイツ兵と一線に砲火を合はすに至つては、昔に、劣つた非能率的性能を暴露する以外何等新規の事實は發見されなかつた。つまり現代の勝れた軍隊の出現は、何等種族的超自然性の理由や、うぬぼれで出来あがるものでなく、たゞ強ひてそれを求むるなら、それは政治的及び社會的合理性に求むる外ない。

といつて自分はこゝに日本との戦争などただの笑戲事ですむといつた考へ方を強くせしめるた

めにかくいふものでもなければ、又日本を恐れて敢て彼と協調的態度を取らうとする人々に對して、その愚を指摘せんとするものでもない。又ロシアとしても日本に對する政策はその根本において常に平和を希望することにおいて變りはないが、太平洋の平和を確立するためには、一面の手段として日本の神話的うぬぼれを現實に裸體にせねばならぬことも手段として考へられないではない。

帝政時代の露國の軍隊をくさしたのはいゝとして、「現實の手段として日本を裸にする」と力味かへつてゐる、たとへ追放の身でも、お里大事に赤軍の實力が強大なりと肩をもつてゐるのは殊勝だ。

「その何れにせよ、アジア及び太平洋の將來を運命づけるものに違ひない事件だが、それ等が長期になればなる程造兵工業と、産業設備と經濟と、教育との關係において優れた方の交戦國が遂に有利な立場に立つてくる。

一體生活標準の低い日本は、結核と他の傳染病との巢だ。これだけでも日本は戦争に大なるハンデキヤップがあるだらうし、それは近代科學知識と、社會的組織と、工場能率と共にいざと

いふ場合に決定的作用をする。」

経済的はともかく、教育状態が不良であつたり、生活標準が低くて、結核と他の傳染病の巢だと云つてゐるのは如何にも認識不足だ。

たしか近年の死亡率は良くなつて各國のうち頭の方に近い筈であるし、無筆者もソ國は百人につき、約五六十人に對し我國は二人か三人で格段差がある筈であつて、南洋あたりの土民と一緒にしてゐるのは恐れ入つた次第である。

「最後に自分はこの一事だけをメンションして置きたい。

日本はロシア又は米國その他戦争を豫想し得る何れの假想國に比しても經濟的に貧弱である。

日本の工場は數年間もの戦争と戰場への必需品を供給するだけの能力に缺けてゐる。

日本の經濟組織は平時においてすら十分の軍隊を支へるべく荷が重過ぎる。日本の軍隊は近代科學と近代戦術とに基く考察において満足であるとは思へぬ。」

我國が原料物資に乏しい事は、平常顧慮の問題であるが、四年や五年で参るとは思はれないし、友邦滿洲國の健全な發達と鞏固なる海軍力のあり限り、十分に補充し得るものと信ずる。——(終)——



昭和八年十二月廿二日印刷  
昭和八年十二月廿五日發行

實價十錢

著者 佐藤 鐵城

不許復製

東京市神田區神保町二ノ廿八番地

發行所 知識と修養會

電話九段一三三六番  
原町東京一四六七番

東京市神田區神保町一丁目卅九番地

發賣所 栗田書店

電話神田六四七番  
原町東京一三三四番